（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>　　　宰主　上田啓之）

以下は、読書会に備え調べたこと、岩倉紙芝居館館主が独断で記載したものである。

孟子、梁の惠王を見る１。
１．梁の惠王は、魏侯の罃（おう）なり。大梁に都す。僭（せん）して王と稱す。諡して惠と曰ふ。史記に、惠王の三十五年、禮を卑（ひくく）し幣を厚くして以て賢者を招く。而して孟軻梁に至る。
■罃は武候の嫡子、異母兄の仲緩と王位を争って即位（前369年）。貝塚先生によれば、竹書紀年から、梁の恵王は即位の36年、斉の威王と協定を結び、互いに王と称することになり、36年に改元して後元元年をたてている。司馬遷はこの改元を襄王の元年と間違へ、恵王晩年の35年（前335年）に孟子との謁見を配したが、この謁見は後元15年（前320年）といふ。僭すとは、候であるに王を称する、身分を違へるをさす。前361年に都を安邑から大梁（開封）に移していた。
■卑禮厚幣、卑禮は謙ること、厚幣は賜物をはずむこと、そうして賢者を招いた。

王の曰く、叟、千里を遠しとせずして來る。亦、將（まさ）に以て吾が國を利すること有らんとするか１。
１．叟は、長老の稱。王謂う所の利は、蓋し國を富ましめ兵を彊くするの類。
■叟は50歳以上。梁の恵王は前400年～前319年とされるようで、81歳の高齢。孟子がこの時50歳とすれば、289年頃に81歳くらいで没したことになる。武侯の晩年以降領土が前341年に田忌・孫臏の率いる斉軍に敗れ、前340年には秦の商鞅に安邑を落とされ、謁見時は梁は斉に服属せしめられ、恵王は翌年に82歳で没している。その中で、恵王は孟子に国難の打開策を求めた。

孟子對へて曰く、王何ぞ必ずしも利を曰はん。亦、仁義有るのみ１。
１．仁は、心の德、愛の理。義は、心の制、事の宜しきなり。此の二句は乃ち一章の大指。下の文は乃ち詳らかに之を言う。後、多く此に放（なら）へ。
■何必　必ずしも～に及ばず。王よ利を言ふには及びません、亦（ただ）仁義あるのみです。この仁義の二句がこの章の大意。以下はそれを詳しく述べるものと注している。

王は何を以てか吾が國を利せんと曰い、大夫は何を以てか吾が家を利せんと曰い、士庶人は何を以てか吾が身を利せんと曰はば、上下交（こもごも）利を征（と）りて國危うからん。萬乘の國、其の君を弑する者は、必ず千乘の家。千乘の國、其の君を弑する者は、必ず百乘の家。萬に千を取り、千に百を取る、多からずとせず。苟（いやしく）も義を後にして利を先にすることを為すは、奪はずんば饜（あ）かず１。
１．乘は去聲。饜は於豔の反。○此れ利を求むるの害を言ひて、以て上の文、何ぞ必ずしも利を曰はんの意を明らかにす。征は取なり。上は下に取り、下は上に取る。故に交（こもごも）征ると曰ふ。國危うしは、將に弑奪の禍有りと謂う。乘は、車數なり。萬乘の國は、天子の畿内、地、方千里、車萬乘を出す。千乘の家は、天子の公卿、采地、方百里、車千乘を出すなり。千乘の國は、諸侯の國、百乘の家は、諸侯の大夫なり。弑は、下、上を殺すなり。饜は足なり。言ふは、臣の君に於る、每に十分にして其の一分を取るも、亦已に多し。若し又義を以て後と爲して、利を以て先と爲すは、則ち其の君を弑して盡く之を奪はずんば、其の心未だ肯えて以て足るとせざるなり。
乘は去聲shèngで百乘、千乘と車を数える語、乗るはchéng。
饜は於豔の反　饜yànは於yú豔（艶）yànの反切（はんせつ）
■王、大夫、士庶人がそれぞれの利を計る。これは下剋上となる。
■每十分而取其一分　10につき1を取る。萬乘の国で千乘を有するは、それ自体で既に多い。しかし、利を優先すれば、千の者は萬を欲し、下が上を征る、つまり、下剋上となる。

未だ有らず、仁にして其の親を遺（すつ）る者は。未だ有らず、義にして其の君を後にする者は１。
１．此れ仁義、未だ嘗て利せずんばあらざる言ふ。以て上文、亦、仁義有るのみの意を明らかにするなり。遺は猶棄のごとし。後は急せざるなり。言ふは、仁者は必ず其の親を愛す。義者は必ず其の君を急す。故に人君躬ら仁義を行いて利を求むるの心無ければ、則ち其の下之に化し、己に戴すを自親す。
■後不急也　（急は他人の難儀や皆のために）急いで助けること。
■自親戴於己也　自親は「みずから」戴は行う、始める、成すこと。人君に感化されて自ら行ふ。

王も亦、仁義を曰はんのみ。何ぞ必ずしも利を曰はん１。
１．重ねて之を言いて、以て上文兩節の意を結ぶ。○此の章言ふは、仁義は人心の固有に根ざす。天理の公なり。利心は物我の相形るに生ず。人欲の私なり。天理に循ふは、則ち利を求めずして自づと利あらざること無し。人欲に徇ふは、則ち利を求めて未だ得ず、而して害已に之に隨ふ。謂う所の毫釐の差（たが）ひ、千里の繆（あやま）り。此れ孟子の書、端を造し始めを託する所以の深意、學者宜しく精しく察して明らかに辨ず所なり。○太史公が曰く、余孟子の書を讀みて、梁の惠王何を以て吾が國を利すと問ふに至り、未だ嘗て書を廢てて歎ぜずんばあらず。曰く、嗟乎（ああ）、利は誠に亂の始めなり。夫子、罕（まれ）に利を言うは、常に其の源を防くなり。故に曰く、利に放（よ）りて行ふは、怨多し。天子より以て庶人に至りて、利を好むの弊、何を以てか異ならん。程子の曰く、君子未だ嘗て利を欲せずんばあらず。但專ら利を以て心と為すは、則ち害有り。惟れ仁義は則ち利を求めずして、未だ嘗て利せずんばあらず。是の時に當たりて、天下の人、惟（ただ）利を是れ求めて、復仁義有るを知らず。故に孟子仁義を言ひて利を言はず。本を拔き源を塞ぎて其の弊を救ふ所以。此れ聖賢の心なり。
■王よ仁義のみを語り、利を言うに及びませぬ、とする孟子の言葉に司馬遷は書を閉じて嘆息した。利が国を乱すの始め、だから孔子も利に滅多に言及されなかった（[子罕篇１](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/sikan.doc)）。釐（り）は十毫（ごう）、毫釐はわずかなこと。ここをさっと読み過ごすか、立ち止まるか、後には大きな差となる。
読書会：[2010年10月9日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年10月７日)

○
孟子梁の惠王を見る。王沼（いけ）の上（ほとり）に立ちて、鴻鴈麋鹿を顧みて曰く、賢者も亦此を樂しむか１。
１．樂は音洛。篇内同じ。○沼は池なり。鴻は、鴈の大なる者。麋は、鹿の大なる者。
樂の音はlèで楽しむこと。音樂の場合はyuē。好む、願う場合はyào。
■鴻鴈麋鹿は贅沢を象徴する。利なくば、かくなる贅沢は果たし得ない。仁義の賢者もこれを楽しむのか？麋鹿（びろく）、となかいと鹿

孟子對へて曰く、賢者にして而して後に此を樂しむ。不賢者は、此れ有りと雖も樂まず１。
１．此れ一章の大指。

詩に云く、靈臺（れいたい）を經始（けいし）す。之を經（けい）し之を營（えい）す。庶民、之を攻（をさ）む。日ならずして之を成す。經始すること亟（すみやか）にすること勿れとす。庶民子の如く來る。王、靈囿（れいゆう）に在（ま）す、麀鹿（ゆうろく）の伏す攸（とこ）ろ、麀鹿濯濯（たくたく）たり、白鳥鶴鶴（かくかく）たり。王、靈沼（れいしょう）に在す、於（ああ）牣（み）ちて魚躍（をど）れり。文王、民の力を以て臺を爲（つく）り沼を爲りて、而して民之を歡樂す。其の臺を謂ひて靈臺と曰い、其の沼を謂ひて靈沼と曰ふ。其の麋鹿魚鼈（びろくぎょべつ）有るを樂しむ。古の人、民と偕（とも）に樂しむ。故に能く樂しむ１。
１．亟は音棘。麀は音憂。鶴は、詩に翯に作る。戶角の反。於は音烏。牣は音刃。○此れ詩を引いて之を釋す。以て賢者にして而して後に此を樂しむの意を明らかにす。詩は大雅靈臺の篇。經は、量度なり。靈臺は、文王の臺の名なり。營は、謀爲なり。攻は治なり。日ならずは、日を終えざるなり。亟は速なり、言ふは、文王戒むるに亟にすること勿きを以てす。子來は、子の來りて父の事に趨（むかふ）が如きなり。靈囿、靈沼は、臺の下に囿有り、囿中に沼有り。麀は牝鹿なり。伏は其の所に安んじて、驚き動かざるなり。濯濯は肥澤の貌。鶴鶴は潔白の貌。於は歎美の辭。牣は滿なり。孟子言ふは、文王、民の力を用ふと雖も、民反りて之を歡樂す、旣に加うるに美名を以てして、又其の有る所を樂しむ。蓋し文王能く其の民を愛するに由る。故に民其の樂しみを樂しみて、文王も亦以て其の樂しみを享くることを得るなり。
亟は音棘jí。麀は音憂yōu。翯hèは、“かく”と訓じ、真っ白で光沢があること、戶hú角jué（比べる）の反、これではhé、声調が異なる。於は音yúでなく烏（からす）wū、嘆美の辭。牣（充ちる）は音刃rèn。
■詩、大雅、「靈臺」
靈臺を普請す、縄張りして造営す。庶民これに加はり、一日とかからず成る。急ぎ始めることなかれといふに、庶民、子の如く來る。文王、靈囿に入らば、麀鹿も安らぎ伏せる、麀鹿のつややかに肥へたる、白鳥の真白に羽をひろげたる。文王が靈沼に入らば、ああ、魚集まりて踊る。文王、民の力によりて臺を造り、沼を造る。民も歡び樂しむ。さめでたきにより臺を靈臺と曰ひ、沼を靈沼と曰ふ。その麋鹿魚鼈を樂しまむ。古の人、民と偕に樂しみぬ。故にお互ひ樂しみえた。
囿（ゆう）は苑、垣をめぐらして禽獣を放し飼いにし、池に魚を放った広大な庭園。麀鹿（ゆうろく）は牝鹿。偕は倶（とも）と同じ。

湯誓に曰く、時（こ）の日害（いつ）か喪（ほろ）びん。予と女（なんじ）皆に亡びんと。民、之と皆に亡びんと欲せば、臺池鳥獸有りと雖も、豈に能く獨り樂しまんや１。
１．害は音曷。喪は去聲。女は音汝。○此れ書を引きて之を釋す。以て不賢者は此れ有りと雖も樂しまざるの意を明らかにするなり。湯誓は、商書の篇の名。時は是なり。日は、夏の桀を指す。害は何なり。桀嘗て自ら言う、吾天下を有（たも）つこと、天の日有るが如し。日亡ぶは吾乃ち亡ばんのみ。民其の虐を怨みて、故に其の自ら言ふに因りて之を目ざして曰く、此の日何れの時か亡びんか。若し亡ぶは、則ち我寧ろ之と倶に亡びん。蓋し其の亡ぶを欲するの甚だしきなり。孟子此を引いて、以て君獨り樂しみて其の民を恤（あは）れまざれば、則ち民之を怨みて、其の樂しみを保つこと能わざるを明らかにするなり。
害hàiは音曷héで何。喪sāngは去聲sàngで滅びる、滅ぼす。女nǔは音rǔで汝、nùでめあはす、嫁入りさせる。
■書経、湯誓は夏の王、桀を討つの正当性を述べる。桀は、「吾が天下を有つは天に太陽が有るが如し、太陽が滅びぬかぎり吾も滅びぬ」と、虐政を改めなかった。民はそれを怨んで、この日（桀）は何時になったら滅びるのだろう、もし滅びるなら、桀と一緒に滅びたいというのは、民が甚だしく滅びるを欲している。民が一緒に滅びたい、甚だしく怨んでいるときに、臺池鳥獸があっても、自ら独り、どうして楽しむことができましょうや？とする解釈である。

書経、湯誓、「王の曰はく、格（きた）れ爾（なんじ）眾庶、悉く朕が言を聽け。台（われ）小子、敢へて行（枉：まげ）て亂を稱（あ）ぐるに非ず。夏に多くの罪有りて、天命、之を殛（ころ）せしむ。今、爾、有眾，汝が曰ふ、『我が後（后：きみ）我が眾を恤（あはれ）まず。我が穡事（農耕）を捨（お）きて割（なん）ぞ夏を正す。』予、惟汝が眾言を聞く。夏氏、罪有り。予上帝を畏れ、敢へて正（征：う）たずんばあらず。今、汝、其れ曰ふ、『夏の罪、其れ如台（いかん）。』夏王、率（ここ）に眾力を遏（つく）し、率（ここ）に夏邑を割（さ）く。有眾、率（ここ）に怠りて協せずして曰ふ、『時（こ）の日（きみ）曷（いつ）か喪（ほろ）ぶ。予及（と）汝皆（とも）に亡びん。』夏の德茲（かく）の若し、今朕必ず往かん。」とある。
朱熹は予を我、汝を之と置き換えて解釈している。有眾（民）が「予及汝」と言ふはおかしい。民の曰ふは「時の日曷か喪ぶ。」まで、文脈では、予は湯、汝は民とみるべき。この文脈では、このままでは、湯も民も共に亡びる。夏の徳はこんなものだ、朕は必ずこれを倒すために往く、であろう。民欲與之皆亡の之は桀、太陽が亡びぬ限り、自分が亡びぬという桀の圧政下では生きているより死んだ方がいい、もし桀を殺すことが出来るなら自分達が死んでしまってもいい、そういう状況を言ふのではないか。だから、湯は乱を起こすのではなく、桀を討ちこの状況を変えることに正当性があると訴へている。

○
梁の惠王の曰く、寡人の國に於けるや、心を盡くすのみ。河内凶なれば、則ち其の民を河東に移し、其の粟を河内に移す。河東凶なるときも亦然（しか）す。鄰國の政を察（み）るに、寡人の心を用ふるが如くなる者無し。鄰國の民、少なきことを加へず、寡人の民、多きことを加へざるは何ぞや１。
１．寡人は、諸侯の自ら稱す。寡德の人を言ふ。河内･河東は皆魏なり。凶は、歳熟せざるなり。民を移して以て食に就け、粟を移して以て其の老稚の移ること能わざる者に給す。
■**加少**　加は～する、加少は少なくする。加多は多くする。仁政を行へば、遠くから人が集まると儒者は言ふ。惠王は自分は心を盡して政治を行っているが、人が集まってこない、隣国は自分のように心を盡していないが、人が減るでもない、これは一体どういふことか、と惠王が問ふた。

孟子對へて曰く、王、戰を好む。請ふ、戰を以て喩へん。塡然（てんぜん）として之に鼓（つつみ）うち、兵刃旣に接（まじ）はる。甲を棄て兵を曳いて走る。或は百歩にして後に止まり、或は五十歩にして後に止まる。五十歩を以て百歩を笑ふ、則ち何如。曰く、不可なり。直（ただ）百歩ならざるのみ、是も亦走るなり。曰く、王如（も）し此を知らば、則ち民の鄰國より多からんことを望むこと無し1。
1.好は去聲。塡は音田。○塡は鼓の音なり。兵は鼓を以て進み、金を以て退く。直は但の猶（ごと）し。此を言ひて、以て鄰國其の民を恤れまず、惠王能く小惠を行ふに譬ふ。然れども皆王道を行ひて以て其の民を養うこと能はざるに、此を以て彼を笑う可からざる。楊氏の曰く、民を移し粟を移すは、荒政の廢せざる所なり。然れども先王の道を行ふこと能はずして、徒（ただ）に是を以て心を盡くすとするは、則ち未だし。
好は去聲hào、好むこと、好いはhǎo。
塡は音田tián。ドンドンと鼓の音で攻め、カンカンと金の音で退く。
■**棄甲曳兵**　甲は鎧、兵は兵器。鎧を棄て、兵器を引きづって走（にぐ）る。五十歩で止まった者が百歩で止まったものを笑ったが、王よ、これは如何なものか。王は、笑うことはできまい、百歩でなくとも、逃げたにかわりない、と答へた。紀元前341年、馬陵の戦いにおいて魏軍は田忌・孫臏の率いる斉軍に敗れ翌年の紀元前340年に秦の商鞅に西から侵攻され、安邑を放棄し、この会見の頃は、梁は韓とともに、斉に服属せしめられていた。孟子は、戦で民が疲弊していることを突いた。これを放置していることはどの国も同じ。抜本対策を講じないことは五十歩百歩。
読書会：[2010年10月16日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年10月16日)

。
農時に違はずんば、穀勝（あ）げて食ふ可からず。數罟（さくこ）洿池（おち）に入らずんば、魚鼈（ぎょべつ）勝げて食ふ可からず。斧斤時を以て山林に入らば、材木勝げて用ふ可からず。穀と魚鼈と勝げて食ふ可からず、材木勝げて用ふ可からずんば、是れ民をして生を養ひ、死に喪（そう）して憾（うらみ）無からしむなり。生を養ひ死に喪して憾無きは、王道の始めなり1。
1.勝は音升。數は音促。罟は音古。洿は音烏。○農時は、春耕し、夏耘（くさぎ）り、秋收むるの時を謂ふ。凡そ興作すること有れば、此の時に違はず。冬に至りて乃ち之を役すなり。勝げて食ふ可からずは、多きを言う。數は密なり。罟は網なり。洿は、窊下（わか）の地、水の聚まる所なり。古（いにしへ）は、網罟、必ず四寸の目を用ゆ。魚尺に滿たざれば、市に粥（ひさぐ）を得ず、人食ふを得ず。山林川澤は、民と之を共にして、厲禁有り。草木零落して、然して後に斧斤入る。此れ皆治を爲るの初め、法制未だ備はらざるに、且つ天地自然の利に因る。撙節（人の守るべき掟に従う）愛養する事なり。然れども飮食宮室は生を養ふ所以、祭祀棺槨は死を送る所以。皆民の急する所にして無かる可からざる者なり。今皆以て之を資（たす）くること有れば、則ち人恨む所無し。王道は民の心を得るを以て本とす。故に此を以て王道の始めとす。
勝は音升shēng、挙げて、勝つはshèng。
數は音促cù、つまっている、密なこと、かずの場合はshù、数えるはshǔ。
罟は音古gǔ、魚網。數罟は細かい網目の魚網。
洿は音烏wū、水溜り、洿池はため池。窊はくぼみ。
■**不違農事**　農繁期に農民を賦役に駆り出すといふ愚かな政治をしなければ、
■**穀不可勝食**　ことごとく食いつくすことはできぬほど収穫はえられる。
■**數罟不入洿池**　稚魚までねこそぎ採り尽すという漁をしなければ、（魚鼈は食いきれぬほど繁殖する。）
■**斧斤以時入山**　木を切り出す時を制限すれば、（使いきれないほど木は茂る）
穀物や魚鼈が食いきれないほどあれば、民はその生を養うことができ、木材が使いきれないほどあれば、死に際して棺を用意することができる。どうして民が憾むことがあろう。朱子は、それを飲食宮室、祭祀棺槨の始とみている。
飢饉に際して心を盡して、仁政を行ったと恵王は申されるが、民を疲弊させておきながらの盡心は五十歩百歩。生きること、死を迎へるに民の怨みなき政治が仁政、王道の始、そこが抜けている。
読書会：[2010年10月23日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年10月23日)

五畝の宅、之に樹ゆるに桑を以てせば、五十の者以て帛を衣る可し。雞豚狗彘（けいとんこうてい）の畜（やしなひ）、其の時を失うこと無くんば、七十の者以て肉（しし）を食ふ可し。百畝の田、其の時を奪うこと勿くんば、數口の家以て飢うること無かる可し。庠序の敎を謹んで、之に申（かさ）ぬるに孝悌の義を以てせば、頒白の者道路に負戴せず。七十の者帛を衣、肉を食らひ、黎民飢へず寒（こご）へずんば、然ふして王たらざる者、未だ之れ有らず１。
１．衣は去聲。畜は許六の反。數は去聲。王は去聲。凡そ天下を有つ者、人之を稱して王と曰ふは、則ち平聲、其の身の天下に臨むに據りて言ひて王と曰ふは、則ち去聲。後皆此に放ふ。○五畝の宅は、一夫受くる所なり。二畝半は田に在り、二畝半は邑に在り。田の中に木有るを得ず。五穀を妨ぐを恐る。故に牆の下に於て桑を植へて以て蠶事に供す。五十始めて衰ふ。帛に非ざれば煖かならず。未だ五十ならざる者は衣るを得ず。畜は養なり。時は、子を孕字（孕み生み育てる）の時を謂ふ。孟春犧牲に牝を用ふこと毋かれの類の如し。七十は肉に非ざれば飽かず。未だ七十ならざる者は食ふを得ず。百畝の田、亦一夫の受くる所、此に至りて則ち經界正しく、井地均しく、田を受けざるの家無し。庠序は、皆學の名なり。申は重なり。丁寧反覆の意。善く父母に事（つこうまつ）るを孝と爲し、善く兄長に事るを悌と爲す。頒は斑と同じ。老人の頭半ば白黑なる者なり。負は、任背に在り、戴は、任首に在り、夫れ民の衣食足らずんば、則ち禮義を治むるに暇あらず。而して飽煖にして敎無ければ、則ち又禽獸に近し。故に旣に富みて敎うるに孝悌を以てすれば、則ち人親を愛し長を敬するを知りて、其の勞に代はり、之を道路に負戴せしめざる。帛を衣て肉を食ふに、但し七十と言ふは、重きを舉げて以て輕きを見（あらは）すなり。黎は黑なり。黎民は、黑髮の人。猶秦に黔首と言うが如し。少壯の人、帛を衣て肉を食ふを得ずと雖も、然れども亦飢寒に至らざるなり。此れ法制品節の詳を盡くし、財成輔相の道を極めて、以て民を左右（たす）くを言ふ。是れ王道の成るなり。
衣は去聲yì、で着物を着せる。衣服の衣はyī。
畜は許xŭ六lù(古音)の反xù。とあるがxùは動詞、家畜を飼う、やしなう、名詞、家畜の場合はchù。
數は去聲shù、名詞、数える場合はshŭ、しばしばの場合はshuò。
王は去聲wàng、王として天下に臨むこと、動詞。名詞の場合はwáng。朱子は平聲とする。去聲は短く語尾を下げるが平聲となれば、～と長めに高どまらせる。
■雞豚狗彘　雞は家畜の小太りの隹（とり）。豚は豕（いのしし）を食肉用に飼いならしたもの。狗は（飼い小屋で）丸く体を曲げた（句）子犬。彘はこぶた、牝ぶたとされるが、禮記、月令に、「孟春の月、天子乃ち彘を以て麥（むぎ）を嘗（な）む」、嘗麥の儀礼に用ゐられた。
■**五畝之宅、百畝之田**　一里（周尺で405ｍ）を井型で九に区分し、中央を公田、残り八を私田とし、八家族で運営させる。税は1/9。この一区分が百畝（135ｍｘ135ｍ）、一畝は13.5ｍｘ13.5ｍ。宅に桑を植へ養蚕し、絹を産し、家畜を飼ひ、百畝の田畑で五穀や菜を育て、公田の収穫を税とする考へ方。
■**無失其時、勿奪其時**　家畜の孕字、孕むこと、字（育む）こと、繁殖の機会を失うこと無きよう。不違農時のこと、戦や賦役により農事（耕地、種播き、草引き、収穫）を損ふことなかれ。
■**庠序**　「庠序学校を設け為して、以て之を教う。庠は養なり、校は教なり、序は射なり。夏に校と曰ひ、殷に序と曰ひ、周に庠と曰ひ、学は三代これを共にす。皆人倫を明らかにする所以なり（滕文公章句）。」
朱子「大学章句」序に曰く、「夏・殷・周の三代の盛時ともなると、その教育制度はいよいよ整備された。そこで初めて、天子の都や諸侯の国都から地方の村落に至るまで、どこででも学校が設けられるようになった。人が生まれて八歳になると、天子や三公の子弟から庶民の子弟に及ぶまで、みな小学校に入れ、そこで水をうって掃除をしたり、人とのうけこたえをしたり、立居ふるまいをしたりすることの折りめや、礼儀作法と音楽、弓射や馬車の扱い、読み書きと算数などの六芸の学科を教えた。さて子弟が十五歳になると天子の皇太子と皇子たちから公・卿・大夫および天子に仕える士人の嫡男、そして万民のなかから選ばれた俊秀に至るまで、すべて大学に入学させ、そこで理を窮め、心を正し、わが身を修め、人を治めるための方法を教えた（金谷治氏：岩波文庫）。」
■仁政とは、まず、民が自立して生きる根拠と環境を整備し、次いで、教育を施し、孝悌の義を浸透させることである。老人が重い荷を背や首に抱へ、肉を口にすることもできず、絹を着ることはおろか、寒さにこごへている、女、子供とて同じ、若者は兵か賦役にかりだされている、この根本を変へよ！と孟子は言ふ。

。
狗彘（こうてい）人の食を食ふて檢（けん）することを知らず。塗（みち）に餓莩（がひょう）有りて發（ひら）くことを知らず。人死すれば、則ち我に非ず、歳なり、と曰ふ。是れ何ぞ人を刺して之を殺して、我に非ず、兵なりと曰ふに異ならん。王、歳を罪すること無くんば、斯れ天下の民至らん1。
1.莩は平表の反。刺は七亦の反。○檢は制するなり。莩は、餓死の人なり。發は、倉廩（米蔵）を發きて以て賑貸（恵みたすける）するなり。歳は、歳の豐凶を謂うなり。惠王民の產を制すること能はず、又狗彘をして以て人の食を食ふを得せしむ。則ち先王の制度品節の意と異なる。民の飢へて死するに至るも、猶發くことを知らざれば、則ち其の移す所は、特（ただ）に民閒の粟のみ。乃ち民多くを加へざるを以て、罪を歳の凶に歸すは、是れ刃の人を殺すを知りて、刃を操る者の人を殺すを知らざるなり。歳を罪せずして、則ち必ず能く自ら反（かへりみ）て益々其の政を脩むれば、天下の民至らん。則ち但（ま）た鄰國より多きのみならず。○程子の曰く、孟子の王道を論ずる、此の如るに過ぎず、實と謂ふ可し。又曰く、孔子の時、周室微と雖も、天下、猶周を尊ぶの義を爲すを知る。故に春秋は周を尊ぶを以て本とす。孟子の時に至りて、七國雄を爭ふ。天下復周有るを知らずして、生民の塗炭已に極る。是の時に當たりて、諸侯能く王道を行はば、則ち以て王たる可し。此れ孟子の齊梁の君を勸むる所以なり。蓋し王は天下の義主なり。聖賢亦何の心ぞ。天命の改むると未だ改まらざるとを視るのみ。
莩piǎoは平píng表biǎoの反。刺cìは七qī亦yìの反、今とは合はない、刺はqìであったかもしれない。
■**狗彘**　この場合、狗彘は犠牲用として飼はれているものを指すのであろう。民が食とするものが餌として与へられていたのであろう。檢は検、正すこと、取り締まること。道路に餓莩（餓死した民）がいるといふに、王は、それを放置して、正そうとなされない。檢を斂（れん）、集め取る、斂蔵、蔵に蓄めるともされる。狗彘に人の食すものを食らはせ、非常用に備蓄することをしないとなる。
■**莩**　莩は餓死した死体、殍の異体字。
■**發**　發は元来矢を射る、謝儀で邪を祓ふ儀、一斉にぱっとひらくこと。王は、餓死者を前にして米倉を發こうとされない。無関心か？物惜しみか？戦に備へてか？平成の世においても、グローバリズムの名のもと企業生き残りを最優先し、こぞって、内部留保を崩さず、派遣労働者に始まるリストラを断行した。企業戦国時代、社員を切り捨てても生き残る。膨大な餓死者を抱えて核開発に生き残りをかける北朝鮮の金政権。本土決戦、国民玉砕を唱へた日本帝国陸軍。中国での戦いでは万、十万の兵士が動員され、まずは米倉を押さへて、兵士の食糧を確保することが肝要であった。恵王も度重なる敗戦と斉の脅威の前に、米倉を開く余裕はなかった。そこに凶作、飢饉が襲ったとみえる。孟子は米倉を開けと主張した。
■**歳**　歳は元来祭祀名、夏に歳、殷に祀、周に年と称された。年はまた実りでもある。歳時とは、一年と四季である。朱子は歳（実り）の凶作、恵王が飢饉を天災のせいにした、とみている。
■**兵**　斧を両手に持つ様で、武器を持つ人であるが、この場合は武器、朱子は刃とする。飢饉で人が死ぬのは歳のせいであるとは、人を刃で刺し殺し、死んだのは刃のせいだとするに等しい、と孟子は言ふ。平成の世とてリストラをグローバリズムのせいにし、公的資金で再生しながら、巨額のボーナスで幹部を確保することに、オバマ米大統領も不快感を示し、規制の導入に言及された。グローバリズムのせいでこうしないと生き残れない、私のせいではない、と言へば、孟子なら何と言ふであろう。
■無罪歳　罪歳は歳のせいにすること、歳のせいにすること無しとは、自らのせいにすること。堯は、飢へている人がいれば、わたしのせいで飢へている、寒さにふるえる人がいれば、わたしのせいで着るものがない、罪を犯すものがあれば、そのものを犯罪に追いやったのはわたしだと考へる帝と評された。だから天下の民が遠方からもやってきた。
読書会：[2010年10月30日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年10月30日)

○
梁の惠王の曰く、寡人願わくは安んじて敎を承（う）けん1。孟子對へて曰く、人を殺すに梃（つえ）と刃（やいば）とを以てするは、以て異なることを有りや。曰く、以て異なること無し２。刃と政（まつりごと）とを以てせば、以て異なること有りや。曰く、以て異なること無し３。
1.上の章を承（うけ）て言ふ。願はくは意を安んじて以て敎を受けんと。
2.梃tǐngは徒tú頂dǐngの反（切)。梃は杖なり。
3.孟子又問うて、王答ふなり。
■願安　小林勝人氏は、古語では安と焉は通じ、願焉とする。願わくば教えを承けん。
■梃と刃の比を刃と政に対比し、政治が人を死に至らしめることを想起させる。

曰く、庖（くりや）に肥肉（ひにく）有り、廏（うまや）に肥馬有り、民に飢色（きしょく）有り、野に餓莩（がひょう）有り。此れ獸を率ゐて人を食（くら）はしむるなり1。獸もて相ひ食む、且つ人之を惡む。民の父母と爲りて政を行なふて、獸を率ひて人を食はしむることを免れず。惡んぞ其の民の父母爲るに在らん2。仲尼の曰はく、始めて俑（よう）を作る者は、其れ後（のち）無からんか。其の人に象（かたと）うて之を用ふるが爲なり。之を如何（いかん）ぞ其れ斯の民をして飢えて死なしむる３。
１．厚く民に斂して以て禽獸を養ひて、民をして飢へて死なしむるは、則ち獸を驅りて人を食はしむに異なること無し。
２．惡之の惡wùは去聲。惡在の惡wūは平聲。君は民の父母なり。惡んぞ在るは、猶何ぞ在ると言うがごとし。
３．俑は勇。爲は去聲。俑は、葬に從ふ木偶人なり。古の葬る者は、草を束ねて人を爲りて以て從衛と爲す。之を芻靈（すうれい）と謂ふ。人の形に略似するのみ。中古之に易へるに俑を以てし、則ち面目機發（からくり）有りて、太（はなは）だ人に似たり。故に孔子其の不仁を惡みて、其れ必ず後無かれと言ふなり。孟子言ふは、此の俑を作れる者の、但人に象ることを用ひて以て葬すを、孔子猶ち之を惡む。況や實（まこと）に民をして飢へて死せしむか。○李氏の曰く、人の君爲る者は、固より未だ嘗て獸を率いて人を食（くらはしむ）るの心有らず。然るに一己の欲に狥（したが）ひて、其の民を恤（あはれ）まざれば、則ち其の流れ必ず此に至る。故に民の父母爲ること以て之に告ぐ。夫れ父母の子に於る、之が爲に利に就き害を避け、未だ嘗て頃刻（かたとき）も懷に忘れず、何ぞ之を視ること犬馬に如かざるに至らんや。
勇yǒng。爲は～のためにwèi。なす、つくるはwéi。
■　肥肉と肥馬、飢色と餓莩。かくなる政治は、獣に人を食はしめるに等しい。
■　獣同士が食いあうことはおぞましい。民を飢へ、餓死せしむるは、王が獣を率いて人を食わしむるとする誹りを免れぬ。どうして、民の父母たりえよう。
■　無後、子孫が絶える。
■　禮記、壇弓篇に、「孔子の謂はく芻靈者を善と為す、謂はく俑者を不仁と為す、殆（あや）うく人を用ひんか」。俑が人に替わり殉死の俗となるを悪む、民を飢えしめ、馬を肥やすは、獣に民を食はすに等しく、民の父母たる君のなすべきことではない。
読書会：[2010年11月6日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年11月6日)

○。
梁の惠王の曰く、晉の國は天下焉（これ）より強きは莫し。叟の知る所なり。寡人が身に及んで、東、齊に敗られて、長子死す。西、地を秦に喪ふこと七百里。南、楚に辱しめらる。寡人之を恥ず。願わくは死者の比（ため）に一たび之を洒（すす）がん。之を如何（いかん）してか則ち可ならん。
長は上聲。喪は去聲。比は必二の反。洒は洗ぐと同じ。魏は本と晉の大夫魏斯、韓氏･趙氏と共に晉の地を分ち、號して三晉と曰ふ。故に惠王猶を自ら晉國と謂ふ。惠王の三十年、齊魏を擊ち、其の軍を破り、太子申を虜す。十七年、秦、魏の少梁を取る。後に魏又地を秦に數獻し、又楚の將昭陽と戰ひ敗れて、其の七邑を亡ふ。比は猶爲のごとし。言ふは、死者の爲に其の恥を雪（すすが）んと欲す。
長zhǎngは年長、長いはzháng。
喪sàngは滅ぼす、喪（も）の場合は、sāng。
比は比べる場合は、bǐ。必bì二lìの反(切)はbì、およぶ、ならぶ、したがふこと。
■晋は文公のとき覇者となる。九世頃公の時、六卿范氏・知氏・中行氏・趙氏・魏氏・韓氏が強大となる。韓・趙・魏氏は、知氏を滅ぼして之を分つ。幽公の時、絳（こう）・曲沃（きょくよく）を除き、残りは皆韓・趙・魏氏に入り、三晉と号した。三卿、周の威烈王の命を以て侯と為る（前403年）。魏の武侯・韓の哀侯・趙の敬侯の時、静公を廃して家人と為し、其の地を分ち、晉が滅びるが、魏は晋を継ぐものとした。

孟子對へて曰く、地方百里にして以て王たる可し（1）。王如し仁政を民に施し、刑罰を省き、稅斂（ぜいれん）を薄ふし、深く耕へし易（をさ）して耨（くさぎ）り、壯者は暇日を以て其の孝悌忠信を脩め、入りては以て其の父兄に事（つこうまつ）り、出ては以て其の長上に事れば、梃（つえ）を制（つく）して以て秦楚の堅甲利兵を撻（うた）しむ可し（2）。
1.百里は小國なり。然れども能く仁政を行はば、則ち天下の民之に歸さん。
2.省は所梗の反。斂･易は皆去聲。耨は奴豆の反。長は上聲。○刑罰を省き、稅斂を薄ふす。此の二者は仁政の大目なり。易は治なり。耨は耘（くさぎる）なり。己を盡くす、之を忠と謂ひ、實を以てするを信と謂ふ。君仁政を行はば、則ち民、力を農畝に盡くすを得て、又暇日以て禮義を脩むること有り。是を以て君を尊び上に親しみて、死を效（いた）すを樂しむ。
省は所suǒ梗gěngの反shěng。斂･易は皆去聲liàn、yì。耨nòuは奴nú豆tòuの反。長は上聲。
■稅斂　租税を取り立てること。
■制　小枝のある木を刀で切りそろえること。
■梃　真っ直ぐで丸い棒、棍棒。
■撻　杖、鞭などでうつこと。
王が仁政を施し、民が孝悌忠信を脩め、心を一にし、王と民、共に守るべきものがあらば、鎧に身を堅め鋭い武器を持つ兵に、棍棒を揃えて打ちかからせることができる。
読書会：[2010年11月13日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年11月13日)

。
彼其の民の時を奪ひて、耕へし耨りて以て其の父母を養ふことを得ざらしむ。父母凍餓し、兄弟妻子離散す（1）。彼其の民を陷溺す。王往（ゆ）いて之を征（ただ）さば、夫れ誰か王と敵せん（2）。故に曰く、仁者は敵無しと。王請ふ疑ふこと勿かれ（3）。
1.養は去聲。○彼は、敵國を謂うなり。
2.夫は音扶。○陷は、阱（せい：おとしあな）に陷る。溺は、水に溺る。暴虐の意。征は正なり。彼其の民を暴虐するを以て、吾君を尊び上を親しむ民を率（ゐ）て、往（ゆき）て其の罪を正さば、彼の民方に其の上を怨して、我に歸するを樂しむ、則ち誰か我と敵とせん。
3. 仁者敵無し。蓋し古語にして、百里にして王たる可しは、此を以てのみ。恐らくは、王其の迂闊を疑ひて、故に勉めて疑ふこと勿からしむ。○孔氏曰く、惠王の志は、怨に報いるに在りて、孟子の論は、民を救ふに在り。謂ふ所、惟れ天吏は則ち以て之を伐つ可し。蓋し孟子の本意なり。
養は去聲yàng、目上の物を養ふこと。目下の場合はyǎng。夫は音扶fúは、それ、かの。成人男性はfū。
■孟子は、攻められても撃退が可能なことを述べ、続いて、民を貧窮、離散に追い込む国に行きて正（征）すならば、民がどちらを王とするかは明らかであり、仁政を施す王にかなうものはない。王よ疑ふことなかれと口説いたが、ここで終はっている。高齢の恵王は、迂遠なことと疑ひ、たとえその言を行ふとしても、その時間的余裕はすでになく、願いを果たすこと無く、前319年にその生涯を終へた。

○。
孟子、梁の襄王を見る（1）。出でて人に語（つ）げて曰く、之を望むに人君に似ず、之に就いて畏るる所を見ず。卒然として問うて曰く、天下惡んか定まらん。吾對へて曰く、一に定まらん（2）。孰か能く之を一にせん（3）。對へて曰く、人を殺すことを嗜（たし）まざる者、能く之を一にせん（4）。孰か能く之に與（くみ）せん（5）。
1．襄王は惠王の子。名は赫（かく）。
2．語は去聲。卒は七沒の反。惡は平聲。○語は告ぐなり。人君に似ず、畏る所を見ずは、其の威儀無きを言ふなり。卒然は、急遽の貌。蓋し容貌辭氣は、乃ち德の符。其の外此の如しは、則ち其の中で之存する所の者知る可し。王問ふ、列國分かれ爭ふ。天下まさに何の所にか定まるに當る。孟子對ふるに、必ず一に合ひて、然して後に定まるを以てす。
3．王問うなり。
4．嗜は甘（たのし）むなり。
5．王復問ふなり。與は、猶歸のごとし。

語は去聲yù、～に告ぐ。卒cùは七qī沒méi、mòの反、ならcùにならない。沒がmù卒はqùであったかもしれない。惡は平聲wū、いづくんぞ。甘心は思うままにおこなうこと。
■孟子は恵王の子、赫（襄王）と面識がなかったようである。恵王は、赫に孟子の言を聞かそうとはしていなかったようである。長子の申は斉との戦で失っている。
■夏末期の乱れは、殷の湯がこれを統一し、殷末の乱れは、文王、武王がこれを統一した。天下が定まるとするなら、時を違へず、民の生活を安寧に導く王のもとに一つになる。
■「人を殺すことを嗜（たし）まざる者、能く之を一にせん」といふ孟子の言に対して、襄王は、「孰か能く之に與（くみ）せん」、戦国の世に人を殺さず（戦争によらず）して天下を統一する？それで一体誰が賛同しようか、と疑問を呈した。
読書会：[2010年11月20日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年11月20日)

。
對へて曰く、天下與（くみ）せざること莫けん。王、夫の苗を知れりや。七八月の閒旱（かん）すれば、則ち苗槁（か）れぬ。天、油然として雲を作（おこ）し、沛然として雨を下せば、則ち苗浡然（ぼつぜん）として興（を）きぬ。其れ是の如くんば、孰か能く之を禦（ふせ）がん。今夫れ天下の人牧、未だ人を殺すことを嗜しまざる者有らず。如し人を殺すことを嗜しまざる者有らば、則ち天下の民、皆領（くび）を引（の）べて之を望まん。誠に是の如くんば、民の之に歸すること、由（なほ）水の下（ひく）きに就くがごとし。沛然として誰か能く之を禦がん。
夫は音扶。浡は音勃。由は當に猶と作（な）す。古字借用す。後多く此に效（なら）ふ。○周の七八月は、夏の五六月なり。油然は、雲盛んなる貌。沛然は、雨盛んなる貌。浡然は、興起の貌。禦は禁止なり。人牧は、民を牧（やしな）ふ君を謂ふ。領は頸なり。蓋し生を好み、死を惡む、人心の同じき所。故に人君人を殺すを嗜まざれば、則ち天下悦びて之に歸す。○蘇氏の曰く、孟子の言、苟くも大となすのみに非ず。然れども深く其の意を原（たず）ね、詳らかに其の實を究めずば、未だ以て迂とせざる者有らず。予（わ）れ、孟子以來を觀るに、漢の高祖より、及び光武、及び唐の太宗、及び我が太祖皇帝まで、能く天下を一にする者四君。皆人を殺すことを嗜まざるを以て之を致す。其の餘は人を殺すこと愈々多くして、天下愈々亂る。秦晉及び隋、力能く之を合す而して、殺を好むこと已まず。故に或は合して復分かれ、或は遂に以て國を亡ぼす。孟子の言、豈に偶然のみや。
夫は音扶fú。浡は音勃bó。
■孟子は天の時をもって、喩えた。枯れた草は慈雨をもって生き返る。疲弊した民を生き返らせるのは慈雨のごとき王と言ふ。水が高きから低きに流れるように、このような王に人心はなびく。
記述はここで終わっている。
襄王は納得しなかったとみえ、孟子は襄王に見切りをつけ、梁を後にして斉に向かった。

○。
齊の宣王問ひて曰く、齊桓･晉文の事、聞くことを得可しや（1）。孟子對へて曰く、仲尼の徒、桓･文の事を道ふ者無し。是を以て、後世傳ふること無し。臣未だ之を聞かざる。以（や）むこと無くば、則ち王か（2）。
1.齊の宣王、姓は田氏、名は辟彊（へききょう）。諸侯僭して王と稱す。齊の桓公･晉の文公は、皆諸侯に霸たる者。
2.道は言ふなり。董子曰く、仲尼の門、五尺の童子も五霸を稱することを羞ず。其れ詐力を先にして仁義を後にするが爲なり。亦此の意なり。以は已と通じ用ゆ。已むこと無きは、必ず之を言ふを欲して止まざるなり。王は、天下に王たるの道を謂ふ。
■宣王は威王の子、田氏の斉。覇者となった斉の桓公は姜氏。孔子の門下では覇道についてはこれを言ふことは無く、伝承はないとする。論語では[憲問篇](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/kenmon.doc)（17.18）に言及される。
■無以則王乎　覇道を以て申し上げることは無い、王道を申し上げましょうか、の義。

曰く、德何如（いかん）して則ち以て王たる可き。曰く、民を保んじて王たらば、之を能く禦ぐこと莫けん（1）。曰く、寡人が若きは、以て民を保んず可きか。曰く、可なり。曰く、何に由りて吾が可なることを知る。曰く、臣之を胡齕（ここつ）に聞けり。曰く、王堂上に坐（ま）す。牛を牽（ゐ）て堂下を過ぐる者有り。王之を見て曰く、牛何くにか之（ゆ）く。對へて曰く、將に以て鐘に釁（ちぬ）らんとす。王の曰く、之を舍け。吾其の觳觫（こくそく）として、罪無ふして死地に就くが若くなるに忍びず。對へて曰く、然らば則ち鐘に釁ることを廢せんか。曰く、何ぞ廢す可きなり。羊を以て之に易へよと。識らず有りや諸れ（2）。
1.保は、愛護なり。
2.齕は音核。舍は上聲。觳は音斛。觫は音速。與は平聲。○胡齕は、齊の臣なり。鐘に釁るは、新たに鐘を鑄て成りて、牲を殺し血を取りて以て其の釁隙に塗るなり。觳觫は恐懼の貌。孟子胡齕に聞く所の語を述べて王に問ふ。知らず、果たして此の事有りや否や。
齕は音核hé。舍は上聲shě、やむ、すつ、shèでやど。觳は音斛hú。觫は音速sù。與は平聲 yúで～か。
■德何如則可以王　徳がどうであれば王となることができるか。
■保民而王莫之能禦也　民を安んじて王たれば、王たることを妨げるものはない。
■若寡人者可以保民乎哉　私のごとき者でも民を安んじることができましょうか。
■孟子は可と応へる。家臣の胡齕から、新たに鋳造した鐘に牛に血を塗り清めるため、引かれてゆく牛をみて王はこれを憐れみ止めさせた。ではこの儀式を止めますかと聞かれると、犠牲を羊に替えさせたと聞くが本当の事かと、尋ねた。
読書会：[2010年11月27日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年11月27日)

曰く、之れ有り。曰く、是の心以て王たるに足れり。百姓皆王を以て愛（をし）めりとす。臣固（もと）より王の忍びざることを知れり（1）。王曰く、然り。誠に百姓なる者有り。齊國褊小と雖も、吾れ何ぞ一牛を愛まん。卽ち其の觳觫として、罪無ふして死地に就くが若くなるに忍びず。故に羊を以て之に易ふ（2）。曰く、王百姓の王を以て愛めりとするを異（あや）しむこと無し。小を以て大に易ふ。彼惡んぞ之を知らん。王若し其の罪無ふして死地に就くことを隱（いた）まば、則ち牛羊何ぞ擇（えら）ばん。王笑ひて曰く、是れ誠に何の心ぞや。我其の財を愛しんで、之に易ふるに羊を以てするに非ず。宜なるかな、百姓の我を愛しむと謂ふこと（3）。

1. 王牛の觳觫を見て、殺すに忍びざる。卽ち謂ふ所、惻隱の心、仁の端なり。擴めて之を充れば、則ち以て四海を保つ可し。故に孟子指して之を言ふ、王此に察識して之を擴充を欲するなり。愛は猶吝（を）しむのごとし。
2. 言ふは、羊を以て牛に易ふの其の迹は吝しむに似たり。實に百姓の譏る所の如き者有り。然れども我が心、是の如きにあらず、と。
3. 惡は平聲。○異は怪なり。隱は痛なり。擇は猶分のごとし。言ふは、牛羊は皆罪無くして死す。何の分別の所にして羊を以て牛に易へるか。孟子故に此の難を設けて、王の反り求めて其の本心を得んことを欲す。王然ること能わず。故に卒に以て自ら百姓の言を解すこと無し。
惡wū平聲は何ぞ、いづくんぞ。
■罪なくして死するを忍びずとする心があれば王たるに足るといふ。牛を羊に替えるは百姓は物惜しみとみる。しかし、王は物惜しみをしたわけではあるまい。では、一体何故、牛なら忍びず、羊ならよしとしたのか？

曰く、傷（いたむ）こと無し。是れ乃ち仁術なり。牛を見て未だ羊を見ず。君子の禽獸に於る、其の生を見て、其の死を見るに忍びず、其の聲を聞いて、其の肉（しし）を食ふに忍びず。是を以て君子は庖廚を遠ざく（1）。王說んで曰く、詩に云く、他人心有り、予（わ）れ忖（はか）り度（はか）るは、夫子を謂ふなり。夫れ我乃ち之を行なふ、反して之を求めて、吾心に得ず。夫子之を言ふは、我が心に於て戚戚焉たること有り。此の心の王に合（かな）ふ所以の者は何ぞや（2）。
1.遠は去聲。○傷こと無しは、言ふは、百姓の言有りと雖も、害を爲さざる。術は、法の巧なる者を謂ひ、蓋し牛を殺すこと旣に忍びざる所、鐘を釁ること又廢す可からず。此に於て以て之を處すること無くば、則ち此の心發すと雖も、終に施すを得ず。然れども牛を見れば、則ち此の心已に發りて遏（とど）む可からず、未だ羊を見ざる、則ち其の理未だ形（あらは）れずして、妨ぐ所無し。故に羊を以て牛に易へるに、則ち二つの者以て兩つ全を得て害無し。此れ仁を爲す所以の術なり。聲は、將に死すを哀しみ鳴くを謂ふ。蓋し人の禽獸に於る、生を同じふして類を異にす。故に之を用ふるに禮を以てし、忍びざるの心、見聞の及ぶ所に施す。其れ必ず庖廚を遠ざくる所以の者も、亦以て預（あらかじ）め是の心を養ひて、仁を爲すの術を廣むるなり。
2.說は音悦。忖は七本の反。度は待洛の反。夫我の夫は音扶。○詩は、小雅巧言の篇。戚戚は心動くの貌。王、孟子の言に因りて、前日の心復萌し、乃ち此の心外より得ざることを知る。然れども猶未だ其の本に反りて之を推す所以を知らざるなり。
遠は去聲yuànで～を遠ざけること。說は音悦yuè、悦ぶこと。忖cǔnは七qī本běnの反qěnで現在の音とは合はない。度duóは待dài洛luòの反duòで声調が合はないが、はかること、度量衡の度（ながさ）はdù。夫我の夫は音扶fú。
■無傷　牛の替わりに羊ならよしとしたことを傷（いた）むことはない。
■仁術　この場合、仁とは殺されようとする牛に憐憫の情を覚へ、殺すことをやめること。死を感じて鳴く声を聞けば、その肉を食べることもできない。君子は自ら禽獣を殺して食することはない。しかし、鐘を釁る禮を廃することは出来ない。その場に居ない羊を以て犠牲にあてたは術である。羊が引かれておれば、そこに居ない禽獣をあてるがその心理。
■王はよくぞ我が心を忖度（推し測る、理解）していただいたとよろこんだ。その通りである。自分の心に何故かと振り返ってみたが、思ひあたらなかった。先生のおかげで、腑に落ちた。だけど、そのような心でも王たることができるといふは、どういふことであろう、と更に問ふた。
■詩、小雅、「奕奕（えきえき）たる寢廟、君子之を作れり。秩秩たる大猷（ゆう）、聖人之を莫（さだ）めり。他人心有り、予れ之を忖（はか）り度（はか）る。躍躍（てきてき）たる毚（ざん）兔、犬に遇いて之に獲らる。（君子は立派な寢廟を作り、秩序だった道を定める。しかし、人には心があるので、私はその心を胸に手をあて慎重に計る。俊敏で狡猾なるウサギは、犬に遭えば捕まってしまう。）」宣王は内心では、孟子といふ犬に捕まったような警戒心もある。
読書会：[2010年12月4日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年12月4日)

曰く、王に復（まふ）す者有りて曰く、吾が力以て百鈞を舉ぐるに足り、而して以て一羽を舉ぐに足らず。明以て秋毫の末を察するに足り、而して輿薪（よしん）を見ずと。則ち王之を許さんか。曰く、否（いな）。今恩（うつくしび）以て禽獸に及ぶに足って、而して功百姓に至らざるは、獨り何ぞや。然るは則ち一羽を之舉げざるは、力を用いざるが爲なり。輿薪を之見ざるは、明を用いざるが爲なり。百姓の保（やす）んぜられざるは、恩を用いざるが爲なり。故に王の王たらざるは、爲（せ）ざるなり。能わざるには非ざる（1）。曰く、為（せ）ざる者と能はざる者との形、何を以てか異ならん。曰く、太山を挾んで以て北海を超ゆ。人に語（つ）げて曰く、我能はじ。是れ誠に能はざる。長者の爲に枝を折（た）てる。人に語げて曰く、我能はじ。是れ為ざる。能はざるに非ざる。故に王の王たらざるは、太山を挾んで以て北海を超ゆるの類に非ざる。王の王たらざるは、是れ枝を折（を）るの類なり（2）。
1.與は平聲。爲不の爲は去聲。○復は白（まふ）すなり。鈞は三十斤。百鈞は、至りて重く舉げ難し。羽は鳥の羽。一羽は、至りて輕くして舉げ易し。秋毫の末は、毛秋に至りて末銳し。小にして見難し。輿薪は、車を以て薪を載す。大にして見易し。許は猶可のごとし。今恩以下は、又孟子の言なり。蓋し天地の性、人を貴しと爲す。故に人と人とは、又同類を爲して相親し。是を以て惻隱發すれば、則ち民に於て切にして、物に於て緩し。仁術を推し廣むこと、則ち民を仁（いつくしむ）こと易くして、物を愛（をしむ）こと難し。今王此の心能く物に及し、則ち其の民を保んじて王たる。能はざるに非ず、但、自ら肯えて爲さざるのみ。
2.語は去聲。爲長の爲は去聲。長は上聲。折は之舌の反。○形は状なり。挾は、腋を以て物を持つなり。超は、躍りて過ぐなり。長者の爲に枝を折るは、長者の命を以て、草木の枝を折る。難からざるを言ふ。是の心固より有り、外に求むるを待たず。擴めて之を充たすこと、我に在るのみ。何の難きこと之れ有らん。
與は平聲yú、～か。爲不の爲は去聲wèi、～のため。語は去聲yùで告げる。爲長の爲は去聲wèi。長は上聲zhǎng、目上の人。折zhéは之zhī舌shéの反。
■王は殺されようとする牛を忍んだが、生きている羊にはその思ひは及ばなかった。羊のみならず、民にも及ばない、これは何故か。
■能力のあることと、為すか為さぬかの違ひを例へる。王は、その違いを更に問ふ。
■王にその能力がないのか。能力はあるが、為そうとしないのか。
■それは王に為し難いことを求めるものか、為そうと思へば為し易いことを求めるものか。
■孟子は、牛に及ぼした仁の心を、民に推し廣め充たせばよいとする。いかにも簡単そうに喩へたが、実際はそれが難しい。

吾が老を老として、以て人の老に及ぼし、吾が幼を幼として、以て人の幼に及ぼさば、天下をば掌（たなごごろ）に運（めぐ）らす可し。詩に云く、寡妻に刑（のり）とり、兄弟に至り、以て家邦を御（おさ）む、と。言は、斯の心を舉げて諸を彼に加ふるのみ。故に恩（うつくしび）を推（を）せば以て四海を保んずるに足り、恩を推さざれば以て妻子を保んずること無し。古の人大いに人に過（す）ぐる所以の者は他無し、善く其のする所を推すのみ。今恩以て禽獸に及ぶに足りて、功百姓に至らざるは、獨り何ぞや（1）。權にして然して後に輕重を知る。度にして然して後に長短を知る。物皆然り。心を甚だしとす。王請う之を度れ（2）。
1.與は平聲。○老は、老を以て之に事（つこうま）つるなり。吾が老は、我が父兄を謂ふ。人の老は、人の父兄を謂ふ。幼は、幼を以て之を畜（やしな）ふなり。吾が幼は、我の子弟を謂ふ。人の幼は、人の子弟を謂ふ。掌に運らすは、易きを言ふ。詩は大雅思齊の篇。刑は、法なり。寡妻は、德寡（すくな）きの妻。謙の辭なり。御は治むなり。恩を推すこと能はざれば、則ち衆叛（そむ）き親離る。故に以て妻子を保んずること無し。蓋し骨肉の親は、本同じ一氣にて、又但人の同類の若きのみに非ず。故に古人は必ず親を親しむより之を推して、然して後に民を仁しむに及び、又其の餘を推して、然して後に物を愛るに及ぶ。皆近きより以て遠きに及び、易きより以て難きに及ぶ。今王之に反るに、則ち必ず故有らん。故に復本を推して再び之を問ふ。
2. 度之の度は待洛の反。○權は稱錘（はかり）なり。度は丈尺なり。之を度るは、之を稱量することを謂ふ。言ふは、物の輕重長短は、人の齊し難き所にて、必ず權度を以て之を度りて後に見る可し。心の物に應ずるが若きは、則ち其の輕重長短齊し難き、度るに本然の權度を以てせざる可からざる、又物より甚だしき者有り。今王の恩禽獸に及び、功百姓に至らざる、是れ其の物を愛するの心重く且つ長くして、民を仁するの心輕く且つ短し。其の當然の序を失いて、而も自ら知らざるなり。故に上文旣に其の端を發き、此に於て王の之を度るを請ふ。
■自分の老いたる親に仕へる。これがあってこそ、人の老いたる親にそれを及ぼすことが出来る。
■自分の子を育てる。これがあってこそ、人の子にそれを及ぼすことが出来る。
■天下可運於掌　掌は名詞では手のひら、動詞では掌（つかさど）ること。孫悟空がどれほど遠くまで飛べど釈迦様の手のひらの中を飛び回るにすぎない。親に仕へ、子を育て、それを人に及ぼすことができれば、天下を手のひらの中で運用することができる。

■詩、大雅に、「思齊大任　文王之母　思媚周姜　京室之婦　大姒嗣徽音　則百斯男　惠于宗公　神罔時怨、神罔時恫　刑于寡妻　至于兄弟　以御于家邦　・・・周の文王の母、大任は宗廟を奉り、周室の妃として媚（よろこ）ばれた。文王の妃、大姒もその美風を嗣ぎ、文王を大きくした。宗室を継ぎ、神々もそれを善しとした。文王が寡妻（大姒）に法（のり）としたことは、兄弟に至り、家、邦（国）にも容れられ行はれた。」とある。
■舉斯心加諸彼而已　斯心、詩の心、つまりは文王の心、諸も同じ、彼は天下、文王がしたことと同じことをすればよろしい。それが出来ねば、妻子を保（やすん）じることもできない。

■古之人所以大過人者無他　昔の人が今の人より大きに優れていたのは、これより他はない。これさえできればということを、王は禽獣に及ぼすことがあっても、それが百姓に及ばないとするなら、一体それはどういうことでしょう。
■權は重さを稱（はかる）道具、度dùは長さをはかる道具。度は動詞ではかる場合はduó。
■物皆然　心為甚　甚は「おきかまど」で、烹炊（ほうすい；煮たつ）のものを斗で酌むのが斟。ここでは斟酌すること。物は重さや長さで計ることができるが、心は斟酌、汲み取るしかない。王よ何を重きとし、何を軽きとされたか？自らの心を度（はか）ってください。
読書会：[2010年12月11日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年12月11日)

抑々（そもそも）王甲兵を興し、士臣を危うふし、怨を諸侯に構（むす）んで、然して後に心に快きか（1）。王の曰く、否。吾れ何ぞ是（ここ）に快からん。將に以て吾が大いに欲する所を求めんとす（2）。曰く、王の大いに欲する所、聞くことを得可きか。王笑ひて言はず。曰く、肥甘の口に足らざるが爲（た）めか。輕煖の體に足らざるか。抑々采色の目に視るに足らざるが爲めか。聲音の耳に聽くに足らざるか。便嬖（べんぴ）前に使令（しれい）するに足らざるか。王の諸臣皆以て之を供するに足れり。而るを王豈是が爲ならんや。曰く、否。吾れ是が爲ならず。曰く、然らば則ち王の大いに欲する所知る可きのみ。土地を辟き、秦楚を朝せしめ、中國に莅（のぞ）んで四夷を撫（な）でんと欲す。若（か）くのごとくする所を以て、若く欲する所を求めむは、猶木に緣（よ）りて魚を求むるがごとし（3）。
1.與yúは平聲。○抑yìは發語の辭。士は戰士なり。構は結ぶなり。孟子以て、王の民を愛するの心輕くして且つ短き所以の者、必ず其れ是の三つの者を以て快しとすればなり。然るに三つの事は實に人心の快しとする所に非ず、觳觫の牛を殺すより甚だしき者有り。故に指して以て王に問ふ。其の此を以て之を度るを欲す。
2.此に快からざるは、心の正しきなり。而して必ず此をするは、欲之を誘えばなり。欲の誘ふ所の者、獨り是に在り。是を以て其の心尙他に明らかにして獨り此に暗し。此れ其の民を愛しむの心輕短にして、功百姓に至らざる所以なり。
3.與yúは平聲。爲肥･抑爲･豈爲･不爲の爲wèiは皆去聲。便pián･令lìng（平聲とは合致しない）は皆平聲。辟は闢と同じ。朝cháoは音潮。○便嬖は、近習嬖幸の人なり。已は語助の辭。辟は、開廣なり。朝は、其の來朝を致すなり。秦･楚は皆大國。蒞は臨なり。若は此の如き。する所は、兵を興し怨を結ぶ事を指す。木に緣りて魚を求むるは、必ず得可からざるを言う。
■將以求吾所大欲　快ではないが大欲のためには仕方がないと王は言ふ。では王の大欲とは何か。
■肥甘　肥は肥えた肉、甘は美味。
■輕煖　軽くて暖かい衣裳
■采色　采は文彩、文様であるが采女をも指す、装飾品とされるが、妖艶な美女でもある。
■聲音　聲は口に起こり、音は物に起こるが原義。歌舞音曲
■便嬖　便はbiànで便利、ここでは便侫の義でpián、取り入ること。嬖は身分が低くてかわいがられる女が原義で臣をも含むようになる。
■王之諸臣、皆足以供之、而王豈爲是哉　現在の王の諸臣はこれをすべて充たしているに、まさか、これをしたいといふことはありますまい。
■辟土地、朝秦楚、莅中國、而撫四夷也　辟はbìで招致、召し出すこと、pìで拓き広めること。朝はzhàoで朝夕の朝、cháoで朝廷、朝貢すること。莅は位につくこと、撫は安撫の礼を行ふこと。
■以若所爲、求若所欲　若所爲とは王の今のやり方、求若所欲は辟土地、朝秦楚、莅中國、而撫四夷也。

王の曰く、是（かく）の若く其れ甚だしきか。曰く、殆ど焉より甚だしきこと有り。木に緣りて魚を求めば、魚を得ずと雖も、後の災無し。若くのごとく為（する）所を以て、若くのごとく欲する所を求めば、心力を盡くして之を為して、後必ず災ひ有り。曰く、聞くこと得可きか。曰く、鄒人と楚人と戰はば、則ち王以て孰れか勝たんとする。曰く、楚人勝たん。曰く、然らば則ち小は固より以て大に敵す可からず。寡は固より以て衆に敵す可からず。弱は固より以て彊に敵す可からず。海内の地、方千里なる者九つ。齊、集めて其の一を有（たも）つ。一を以て八を服せば、何を以てか鄒の楚に敵するに異ならんや。蓋し亦其の本に反れ（1）。今王政を發（おこ）し仁を施して、天下の仕ふる者は皆王の朝に立んことを欲し、耕へす者は皆王の野に耕さんことを欲し、商賈は皆王の市に藏さんことを欲し、行旅は皆王の塗に出んことを欲し、天下の其の君を疾（にく）まんと欲する者は皆王に赴（をもむき）愬（うった）へんことを欲せしめん。其れ是の若くば、孰か能く之を禦がん（2）。
1.甚與･聞與の與yúは平聲。○殆dài･蓋gàiは皆發語の辭。鄒は小國。楚は大國。齊集めて其の一を有つは、言ふは、齊の地を集め合せて、其の方千里、是れ天下の九分の一を有つ。一を以て八を服せば、必ず勝つこと能わず。所謂後の災ひなり。本に反るは、說下文に見ゆ。
2.朝は音潮。賈gǔは音古。愬は訴と同じ。○行貨を商と曰い、居貨を賈と曰う。政を發し仁を施すは、天下に王たる所以の本なり。近き者悦び、遠き者來れば、則ち大小強弱は論ずる所に非ざる。蓋し力(つと)めて欲する所を求むは、則ち欲する所の者反って得可からず。能く其の本に反れば、則ち欲する所の者求めずして至る。首章の意と同じ。
■若是其甚與　「辟土地、朝秦楚、莅中國、而撫四夷也」と求むことは、木に登って魚を求めるほど甚だしいというのか。
■殆有甚焉　殆dàiは危ういこと、ここではおそらくの義。おそらくもっとひどいことがある。災いがあるとする。齊は方千里の大国であるが、1/9にすぎない。その１つの齊が莅中國を求むは、鄒が楚を敵にするに等しく、災いとなる。
■蓋亦反其本矣　蓋gàiは發語の辭、おそらく、そもそも、やはり。其本とは文王のとった行動、殷王、紂の圧政の下、徳を慕って諸侯が文王の下に心を寄せた。紂王が文王を捕えたが、この動きをとどめることはできなかった故事に譬へている。
読書会：[2011年1月8日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2011年1月8日)

王曰く、吾れ惛（くらふ）して、是に進むこと能はず。願はくは夫子吾が志を輔けて、明らかに以て我を敎へよ。我不敏なりと雖も、請ふ嘗（こころみ）に之を試（こころみ）ん（1）。曰く、恆（つね）の產無ふして恆の心有る者は、惟（ただ）士能（する）ことを爲（す）。民の若き、則ち恆の產無ければ、因りて恆の心無し。苟も恆の心無ければ、放辟邪侈、せざること無きのみ。罪に陷るに及びて、然して後に從って之を刑す。是れ民を罔（あみ）するなり。焉んぞ仁人位に在ること有りて、民を罔すること爲（す）可けん（2）。
1.惛は昏と同じ。
2.恆は胡hú登dēngの反héng (声調が合わない) 。辟は僻と同じ。焉は於yú虔qiánの反yān (声調が合わない) 。○恆は常なり。產は生業なり。恆產は、常に生く可きの業なり。恆心は、人常に有る所の善心なり。士は嘗て學問し、義理を知る。故に常の產無しと雖も、而して常の心有り。民は則ち然ること能はず。罔は猶羅網（鳥や獣を捕える網、人を陥れるわな、計略）のごとし。其の見えざるを欺きて之を取るなり。
■惛　昏に昏冥の意がある。憭（あきら）かならざる（説文）、癡（おろか）なり（広雅、釈詁）の義。王は孟子が何を言わんとしているのかピンとこない。はっきりと分かるように話してくれと云ふ。
■生業に就いておらずとも、善き心を維持できるのは、士、先王の道を志す者のみであり、民が生業を持たねば、放辟邪侈（わがままでよからぬ考えを抱き見栄を張る）、挙句罪を犯して、刑罰を得る。
■民を罠にかけているようなもので、仁人がなすべき政治とはいえない。
読書会：[2011年1月15日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2011年1月15日)

是の故に明君は民の產を制して、必ず仰（あを）ひで以て父母に事（つこうまつ）るに足り、俯して以て妻子を畜（やしな）ふに足り、樂歳は身を終ふるまでの飽（あ）き、凶年は死亡を免れしむ。然して後に驅って善に之（ゆ）かしむ。故に民の之に從ふこと輕し（1）。今民の產を制して仰ひで以て父母に事るに足らず、俯して以て妻子を畜ふに足らず、樂歳は身を終ふるまで苦しみ、凶年は死亡を免れず。此れ惟死を救ひて、贍（た）らざらんことを恐る。奚んぞ禮義を治むるに暇（いとま）あらん（2）。王これを行はんと欲せば、則ち盍（なん）ぞ其の本に反らざる（3）。五畝の宅、之に樹るに桑を以てせば、五十の者以て帛を衣る可し。雞豚狗彘（けいとうくてい）の畜ひ、其の時を失うこと無くんば、七十の者以て肉（しし）を食らふ可し。百畝の田、其の時を奪うこと勿くんば、八口の家以て飢ふること無かる可し。庠序の敎を謹み、之に申（かさ）ぬるに孝悌の義を以てせば、頒白（はんぱく）の者道路に負戴（ふたい）せず。老たる者帛を衣、肉を食らひ、黎民（れいみん）飢へず寒（こご）へず。然して王たらざる者は、未だ之れ有らず（4）。
1.畜は許xǔ六liùの反xù、下も同じ。（chùは家畜のこと。）○輕は猶易しのごとし。此れ民に常の產有りて、常の心有るを言ふ。
2.治は平聲（zhī なら知、zhíなら直）。凡て治の字、物を理（おさ）むるの義爲るは平聲、己に理むるの義爲るは去聲zhì。後も皆此に放（なら）ふ。○贍は足るなり。此れ所謂常の產無くして、常の心無き者なり。
2.盍は、何不なり。民に常の產有らしむ者は、又政を發し仁を施すの本なり。說は下文に見ゆ。
3.音は前章に見ゆ。○此れ民の產を制するの法を言ふなり。趙氏曰く、八口の家は、上農夫に次ぐ。此れ王政の本、常に生ずるの道なり。故に孟子齊梁の君の爲に各々之を陳ぶ。楊氏曰く、天下を爲むる者は、斯の心を舉げて諸を彼に加ふるのみ。然るに仁心仁聞有りと雖も、民其の澤を被らざるは、先王の道を行はざるが故なり。故に民の產を制することを以て之に告ぐ。○此の章言ふは、人君當に霸功を黜（しりぞ）け、王道を行ふのこと。而して王道の要は、其の忍びざるの心を推して、以て忍びざるの政を行うに過ぎざるのみ。齊王此の心無きに非ずして、功利の私に奪はれて、擴充して以て仁政を行うふこと能わず。孟子の反覆曉告(さとすように告げる)、精切なること此の如きを以てすと雖も、蔽固已に深く、終に悟ること能はず。是れ歎ず可し。
■制　木を切り揃えることが原義。天子の命を制といひ、勅許を制可といふ。民の生業を定め、必ず、父母に仕へ、妻子を養ひ、樂歳（豊年）に終生満ち足り、凶年に飢え死ぬことのないようにして、善を行ふようにしむけるが順序。しかし、現実は、民に生業を定めて父母に仕ふに足らず、妻子を養ふに足らず、豊年も一生苦しみ、凶年に飢え死ぬことを免れずの状態。
■飽は満ち足りていること。贍はつぎ足すこと。　これでは、死を救い、供給が追い付かないことを恐れるのみ。どこに禮義を身につける暇がありましょう。
■盍は、何不なり。　何ぞ～せざる。之は「制民之産、必使仰足以事父母、俯足以畜妻子、樂歳終身飽、凶年免於死亡、然後驅而之善」のこと。これを行はんことを欲すなら、どうしてその本に返らないことがあろうか。いや返るべきである。
■滕文公章句上に、「庠序學校を設（た）て爲（つく）りて以て之を敎ふ。庠は、養なり。校は、敎なり。序は、射なり。夏は校と曰ふ。殷は序と曰ふ。周は庠と曰ふ。學は則ち三代之を共にす。皆人倫を明らかにする所以なり。人倫上に明らかにして、小民下に親しむ。」とあり「庠は老を養ふを以て義と爲し、校は民を敎ふるを以て義と爲し、序は射を習ふを以て義と爲す。皆郷學なり。學は國學なり。之を共にすは、異名無きなり。倫は序なり。父子に親有り、君臣に義有り、夫婦に別有り、長幼に序有り、朋友に信有り。此れ人の大倫なり。庠序學校は、皆以て此を明らかにするのみ。」と注される。
大学章句朱熹序に、「人生れて八歳なれば、則ち王公より以下、庶人に至るまでの子弟は、皆小學に入りて、之に敎うるに灑掃･應對･進退の節、禮･樂･射（弓）･御（車）･書･數の文を以てす。其の十有五年に及びては、則ち天子の元子･衆子より、以て公･卿･大夫･元士の適子と、凡民の俊秀とに至るまで、皆大學に入りて、之に敎うるに理を窮め、心を正しくし、己を脩め、人を治むるの道を以てす。」とある。
■申は神の初文、電光の形。書、堯典に、「申（かさ）ねて羲叔に命ず」、詩、小雅、采叔に、「福禄これを申（かさ）ぬ」とかさね加える申重の意に用いる。

孔子は諸侯の宰相となり、周公の政治を復興する夢に破れた。孔子の亡き後、教団は孔子の言葉を編纂し論語とし、孝経、礼記などを著し、すべての人間の教師としての孔子の教えを広める方向に向かっていた。しかし、孟子は、教団とは逆に、諸侯に先王の政治を説き実現せんとした。孔子にして不可能なことを実践するのであるから、これには並々ならぬ決断を要したことであろう。孟子は、孔子と異なり、シンプルなメッセージを、巧みな比喩で二者択一を迫り、たたみ込むように繰り返した。湯や文王が七十里、百里の国で行った政治に光をあて、彼等がその身を修め、その国の民の心を得、更に諸侯の心を得て、天下がそれに従った道を集中的に戦国の王に説いた。それは、かつて実際に起こった歴史的な事実であり、それこそが、天下に王たる者の道であるとした。孔子はさように自分に酔ったような対応をすることはなかった。
孔子が書百篇を編纂し序を付けたとされるが、孔子は述べて作らずの人であり、修飾を加へることはなかったであろうし、孟子の如くある一点に絞り込んで、相手に迫ることはなかった。孟子は書や詩を引用して、この強烈なメッセージを残した。しかし、湯王、文王など、先王達の治世が果たして本当にそうであったのか？書経の詳細な検討が行はれざるを得なかった。ただその頃に用ゐられた金文、竹簡によるテキストは現存しない。
秦の焚書、項羽軍による秦宮殿の放火により、公的には消失した。秦の博士であった伏生が壁中に隠し、後に探し出した今文（隷書）29篇、孔家が壁中に隠し孔安国の時に見出された古文46巻も現存はせず、これ等から再編纂されたテキストが現在残っている書経といふが、戦国時代における偽作の部分が加へられている。
孟子も孔子と同じく、諸侯をその目指す政に向かはしめることはできなかった。しかし、孟子の遊説は、理想的な先王の政（まつりごと）を立証するための営みに火をつけ、戦国時代にその原型を構成し、漢代に欠落部分を埋めて、先王達や孔子を聖人に祭り上げせしめる一翼を担ったのであろう。
読書会：[2011年1月22日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2011年1月22日)